

高校家庭科におけるさをり織りを用いた障がい者理解に向けた取り組み

—外部連携・ICTを活用したダイバーシティ教育—

葭内 ありさ*

‘SAORI’ and home economics in building understanding of disabilities:

Utilising ICT and external cooperation in diversity education

Arisa YOSHIUCHI

Abstract

This study investigated how one second-grade (second-year) Japanese high school home economics class aimed to nurture respect for diversity by increasing students’ awareness of disabilities. It also aimed to explore how information and communication technology (ICT) may foster communication about diversity. Participants were 120 students (aged 16–17) from a Tokyo high school. Three classes (40 students each) collaborated with a metropolitan welfare institution for adults with intellectual disabilities. Adults from the institution produced ‘SAORI’, a type of hand-woven fabric expressing the weaver’s personality, as part of their vocational program. Students used the Internet to overcome distance between the high school and the welfare facility during the study. Internet technology allowed students to communicate with the SAORI-making adults and the facility staff, as well as to increase the ability of students able to communicate remotely to work on their projects. The students made clothes using the SAORI fabric and produced short videos about their work that were simultaneously screened at the welfare facility and at their school with questions and discussion via Internet chat. The survey of the students found that they deepened their understanding of diversity with disabled individuals.

Keywords: Disabled people, Diversity, High School, Home economics, SAORI

1 はじめに

2016年4月に「障害者差別解消法」が施行され、障がい者¹への合理的配慮を求める事が法的にも定められた。障がいの有無、ジェンダー、宗教、民族、人種、性的志向等、個人の違いの幅による多様性を生かした共生社会を目指すダイバーシティ教育が一層求められるようになったと言える。しかしながら、一方で、現状では、普通学級の高校生が障がい者と交流することにより、障がい者理解を深める機会は限られている。学校においては、特別支援学級が設置されている中学迄の義務教育段階とは異なり、高校段階では、特別支援学級の設置は制度上は可能でも、実際に設置されている例はない。義務教育段階においても、必ずしも特別学級と、普通学級の児童・生徒との交流が図られている訳ではなく、交流が行われていても常に理解促進に効果的な

キーワード：障がい者、ダイバーシティ、高校、家庭科、さをり織り

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

手法であると言える訳ではない。しかしながら、特別支援学級の置かれていない高校段階においては、教育の中で意識的に障がい者との交流を図らなければ、障がい者理解の機会を得る事は一層容易くないことは確かである。研究対象とした A 高校 2 年生の事前調査では、障がい者施設への知識を「とても持っている」と答えた生徒は 2%、「少しはある」と答えた生徒は 33%に過ぎず、65%の生徒は、障がい者施設に知識がない状況である。この事前調査では、障がい者に対する知識そのものについては質問してはいないが、障がい者施設への知識があることは、障がい者自身への理解にも繋がると思われる。

こうした状況の中、本研究では、高校普通科必修の家庭科において、高校生の障がい者施設、ひいては障がい者への理解を深め、多様性、ダイバーシティを尊重する視点を育成する手法の効果を検証することを目的とした。

家庭科に於ける、普通学級の高校生の障がい者理解に関わる先行研究としては、古くは、1981 年の国連障害者年を契機とした「国連・障害者の 10 年」において、1982~1991 年度の家庭科教育における授業実践内容を分析したもの（菊池、山石、影山、舟橋、1993）があるが、障がい者について、中学・高校の保育領域で障がい発症予防の見地だけで取り上げたものが多く、障がい者への理解の視点が不十分であることが指摘されている。

高校における障がい者との家庭科での交流の先行研究としては、家庭科選択科目で特別支援学校高等部に生徒が訪問し作業交流したもの（皆川、福井、2016）や、必修科目で高校生が知的障がい者授産施設を少人数で複数回に渡り訪問し、ボランティアを行い福祉意識の形成を試みた研究（野中、中間、1999）が挙げられる。

普通学級と特別学級の交流については、「むしろ障害をもつ子ども達の能力が正しく評価されない交流教育では、障害に対する偏見や無理解につながり、その結果差別を助長し誤った認識を固定する可能性さえある」（菊池、舟橋、須賀、1996、p151）ことが指摘されており、交流を行う教員はその内容を吟味する必要がある。そこで、本研究では、障がいの有る無しに関わらない、それぞれの才能、能力、「輝き」や個性に着目しやすい交流を行うことにより、障がい者への肯定的な意識を育むことを目的とした。

今回の研究では、そのための手法として、知的障がい者通所福祉施設と外部連携し、知的障がい者の織ったさをり織りを用いることにした。さらに、ICT を活用した交流²を行うことにより、遠隔地で、一般に多人数での訪問は容易くない福祉施設との効果的な連携授業を試みた。

さをり織りとは、1968 年に城みささが考案した手織りの織物であり、糸の色や糸の強弱等の決まり事はなく、感性で自由に織る織物である。従来の整然とした織物では傷とされるような糸の抜けや緩みも、織物に風情や表情を与える魅力となり、織り手は自らの感性を生かして「差」を織り込む。そこには必ずから個性が立ち昇る。常識や既成概念に捉われずに自由に織ることにより感性を引き出す、自己発見・自己表現の手段としての織物がさをり織りである。このように個性を表すことのできるさをり織りは、障がい者施設や高齢者の社会参加の作業としても広く用いられている³（城、2011）。

さをり織りを用いた研究としては、菊池らが 1991 年に、健常児だけではなく障がい児の家庭科教育への理解を深めること等を当初の目的に小学校における普通学級と特別支援学級との交流を行い、さらに、その際に「障害児・者がすばらしい作品を創出し生き生きと活動する姿を確かめた」ことにより、さをり織りを用いる手法への理解を深めるために大学生と特別支援学級でも交流を行った実践がある（菊池、舟橋、須賀、1996）。また、養護学校において、さをり織りと自閉症障がい者の行動障がい改善に関する研究（中川、藤田、1997）がある。

本研究では、普通科高校家庭科必修科目において、複数回に分けて少人数で訪問するのではなく、クラスの生徒全員で一斉に、知的障がい者通所福祉施設との交流を図り、その手段として ICT を活用した。さらに、個性を生かす、障がい者の製作したさをり織りを用いることを通じて、生徒が障がいの有無以前の個性や「輝き」に着目し易くすることにより、障がい者への肯定的な意識の醸成を試みた。

2 方法

対象は、A 高校 2 年生、40 名×3 クラスからなる、120 名の高校家庭科の授業である。科目は家庭科必修「家庭総合」であり、期間は 2016 年 4~11 月、総時間数は 18 時間で実施した。

方法として、第一に、知的障がい者通所福祉施設との外部連携のための関係形成および事前準備を行った。高校の授業担当教員が、知的障がい者施設に事前に電話をした上で訪問し、担当職員と授業実施について相談した。その際に施設全体の見学とさをり織りを行っている通所者への挨拶と作業見学を行い、許諾を得て通所者のさをり織りの様子のビデオ録画および担当職員から高校生へのビデオメッセージを録画した。教員が施設のさをり織りの在庫より高校生 120 名が授業で用いるさをり織りを選び、購入した。また、パンや焼き菓子工房の担当者にもインタビューを行った上で、教員試食分を購入した。高校との交流日が近付いてから事前に教員が再度施設を訪問し、授業で生徒に配布用のクッキーを購入した。第二に、知的障がい者製作品のさをり織りを活用したブラウスの製作を行った。第三に、外部連携で知的障がい者通所福祉施設とのインターネット交流を行い、第四に ICT 活用を行った。交流時にはフィールドノートによる記録を行った。さらに第五として高校生の事前事後の意識調査を行った。

高校生は施設の作業所で通所者が織ったさをり織りを用いたブラウスを 4 月から 8 月にかけて製作した。さらに 9 月にそのブラウスを紹介する動画を班で製作し、施設で 11 月に上映会を行い、その際にインターネットビデオ通話を用いて東京の高校と施設を繋ぎ、施設見学や通所の障がい者、施設職員の方々と高校生との双方向の交流を行い、事前事後のアンケート調査と感想の分析を行った。インターネットビデオ通話による交流は、2016 年 11 月 15 日（火）、18 日（金）に行われた。

連携したのは、首都圏の知的障がい者通所福祉施設である。2016 年の交流時には成人 33 名(施設職員インタビューより)の通所者が様々な作業を行っている。さをり織りは、通所者の内職軽作業として行われており、織りあがった作品は、一部は小物等に加工されて販売や展示されているものの、大半は織物のまま使用用途未定として保管されている。今回はその保管されていた織物を用いた。

連携した施設は、さをり織り以外にも、就労支援事業として、パンや焼き菓子工房、カフェを併設しており、高校生に多角的に施設や通所者の様子を伝えるのに適している施設であるものの、高校からは電車で約 1 時間半の距離であり、直接訪問は難しい。

そのため、ICT 活用を行った。ICT 活用は、交流のための生徒による動画作成や、事前学習としての生徒自身による調べ学習、インターネットビデオ通話を用いた施設と高校授業との交流において用いられた。

通常、福祉施設との外部連携の際には、施設側の受け入れに対する理解と協力がまず第一に必要である。その他にも、交流実現に必要な課題として、連携施設までの学校からの距離が近いのか、生徒の訪問しやすい場所かどうか、一度に交流できる人数が限られることが多いために、少人数に分けての複数回に渡る交流実施受け入れの可否や、そのための授業時間の確保、といったことが挙げられる。そこで、本研究ではインターネットビデオ通話を用いることで、それらの課題の克服を試みた。授業の前後には高校生に意識調査を行った。

3 授業の経緯

3.1 さをり織りの紹介とブラウスの製作

高校生は最初にさをり織りを紹介する授業を受けた後、さをり織りを用いたブラウスを作った。さをり織りは授業担当教員が、事前に連携する施設を訪問し、大量の在庫の中から選択して購入し、生徒に配布した。授業の初めに、施設の職員の方のビデオレターを高校で上映した。職員の方からは、さをり織りの説明や、生徒がさをり織りを用いて作品を作ることに期待している、というメッセージが送られた。

3.2 動画作成

次に、完成したブラウスを用いて動画を作成した。40 名のクラス内で 10 人の班を 4 つ、3 クラスで計 12 班

を作り、各班は作成したブラウスにブランド名をつけ、3分間のブランドプロモーションビデオの作成を試みた。ビデオはさをり織りを提供した施設の方々と、一般の方々を視聴者として考えて作ることにした。作成の際には、監督、美術監督を含むスタッフの役割を決め、ユニバーサルデザインに配慮し、字幕を入れる事、可能ならば英訳も入れる事、を条件としながら作成した。

3.3 インターネットによるビデオ上映と交流

完成したビデオは、施設で上映し⁴、施設と高校との交流を行った。交流は、2016年11月15日午後1クラス、11月18日午後2クラス合同で行われた。

教員A、Bの2名で授業を担当し、教員Aは東京都の高校で生徒と教室で待機し、教員Bは首都圏の施設を訪問し、インターネットで繋ぐことで、高校生と、施設の職員、さをり織りに関わる通所者との、インターネットビデオ通話による交流を行った。生徒にタブレットPCのビデオ通話で施設を紹介し、また、施設でビデオ上映会を施設の職員と通所者の方々にし、その様子の中継した。

施設担当者と教員で事前に交流可能な時間について検討したところ、通所者の方々の集中力と、施設の対応可能な時間帯との観点より、ビデオ上映と通所者の方々との交流可能時間は約20分間が適当とされた。上記を踏まえ、当日は以下のスケジュールで、施設見学と交流授業を進行した。

3.3.1 施設についての事前調べ学習（於高校）

生徒は交流する知的障がい者通所福祉施設と、さらに生徒の自宅近くの障がい者施設を調べた。その際配布したタブレットPCや、デスクトップPCを用いて、インターネットで各自が情報を得てプリントにまとめた。自宅のすぐ近くに施設があることを発見しその特徴を知る生徒や、通所施設に様々な活動が含まれること等を生徒が自ら学習した。

3.3.2 施設紹介（施設と高校間のインターネット中継）

施設に赴いた教員BがタブレットPCビデオ通話で高校と施設を繋ぎ、施設の外観と内部をレポートした。

3.3.3 施設の焼き菓子の試食（於高校）

事前に施設より購入しておいた、クッキー等の焼き菓子を高校生全員で試食した。先ほど映像で見たばかりの焼き菓子が高校で生徒に配布された。

3.3.4 交流（20分間、高校と施設とのインターネット中継）

施設で、さをり織りを行う通所者と、職員の方々が集合し、交流を行った。最初に複数の職員が通所者の方々を高校生に紹介する中で、さをり織りの実演や、どのような気持ちでさをり織りを織っているか等をお話しいただいた。さをり織りを身につけて交流に臨んだ通所者は、「織物を、恋をするような気持ちで織っている」、また、「糸の色それぞれに施設職員のイメージを重ねて織り込んでいる」、等と、織物に心を込めて織っている様子が高校生に伝えられた。このような交流の後、高校生の製作したプロモーションビデオを見て貰った。これらの様子を高校とインターネットビデオ通話で中継した。ビデオ上映中は通所者の上映時の反応やコメントが高校生へ伝わり、上映後、通所者から高校生へのメッセージや質問を高校に中継した。通所者の一人は、高校生に手紙を用意し、「自分の将来の夢はさをり織り職人になる事ですが、皆さんの将来の夢は何ですか」、と尋ね、高校生が答える場面もあった。交流の最後に高校生のお礼を高校から中継した。

4 高校生への事後意識調査

高校生は事後意識調査のアンケートに回答した。回答数は109名である。アンケートは、以下の選択式設問

と、自由記述からなる。

4.1 選択式設問

問1 施設についての理解は深まりましたか

問2 施設が身近に感じられましたか

問3 インターネット交流に関心は持てましたか

問1～3の回答の選択肢：（とてもそう思う・そう思う・ほとんど思わない・全く思わない）

4.2 自由記述：交流の感想

4.3 アンケート結果

4.3.1 選択式設問の結果

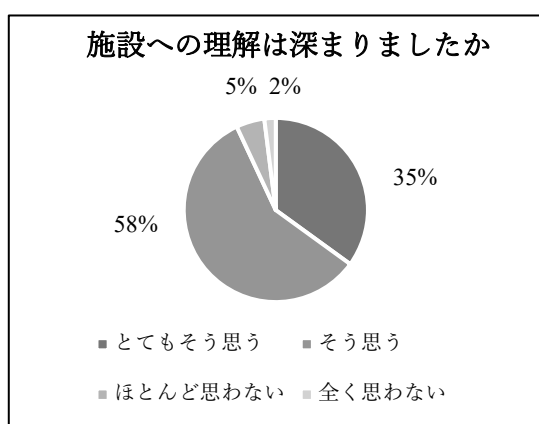


図1. 問1. 回答

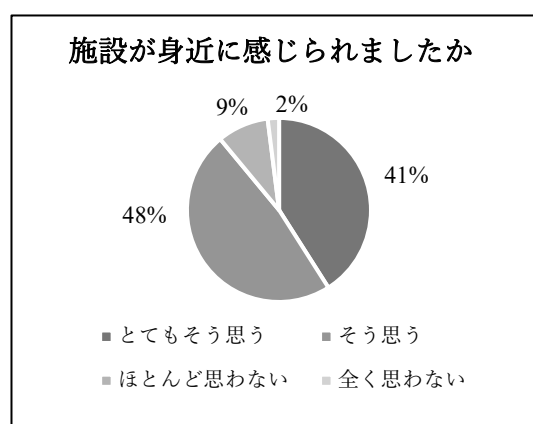


図2. 問2. 回答

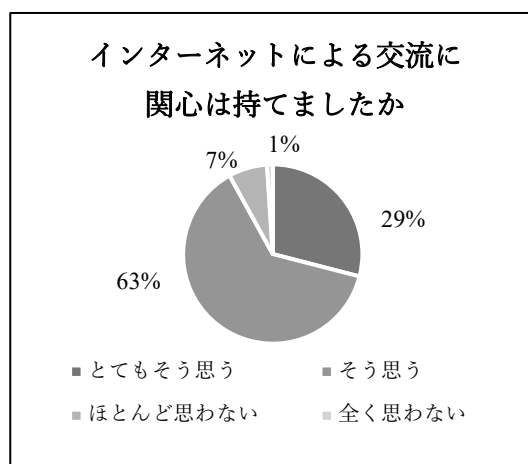


図3. 問3. 回答

選択式設問アンケートでは、「施設についての理解は深まりましたか」という問いでは、「とてもそう思う」と答えた生徒は35%、「そう思う」は58%であり、「ほとんど思わない」は5%、「全く思わない」は2%であり、93%の生徒が施設への理解を深めたことが明らかになった。また、「施設が身近に感じられましたか」という問いには、「とてもそう思う」は41%、「そう思う」は48%、「ほとんど思わない」は9%、「全く思わない」は2%であり、89%の生徒が施設を身近に感じた、と回答した。「インターネットによる交流に関心は持てましたか」という問いでは、29%が「とてもそう思う」、63%が「そう思う」、7%が「ほとんど思わない」、1%が「全く思わない」と回答し、92%の生徒が肯定的であった。なお、3クラスの内、1クラスはインターネットの接続

が途中で途切れ画像や音声が届かないことが他のクラスよりも多く、ビデオを視聴した際の通所者の笑い声やコメントが途切れがちであった。「全く思わない」と回答した1名の生徒は、このクラスの生徒であり、また、このクラスではインターネットを使った交流に関心が持てましたか、の問いに「とてもそう思う」と回答した生徒が15%であったが、他のクラスではそれぞれ38%、35%であり、インターネット接続状況が不安定で交流が他のクラスに比較して円滑ではなく、十分ではなかったことが、生徒の関心度に関係していると考え

表1. 生徒事後意識調査アンケートから抽出した概念とヴァリエーション

No.	カテゴリー	No.	概念	ヴァリエーション (具体的な記述例)
①	さをり織りを通じた気づき	1	さをり織りの魅力や作り手の思いへの意識形成	・とてもきれいな色でとても丁寧に作られていました。作り手の真心が込められたものでハサミを入れるのに気が進まなかったほどです。
		2	さをり織りの技術の高さへの意識形成	・作品は目が細かく、色も鮮やかできれいだった。障害のない私でもできないだろうと感じた。 ・技術や繊細さ、それぞれの美しさに驚いた。
		3	さをり織りに表れた個性への意識形成	・実際のさをり織りは、個性溢れる世界で1つの編み物だと思った。 ・一人一人個性があって楽しそうだと思います。
		4	さをり織りの体験への意欲喚起	・私もやってみたいと思った。
②	施設についての気づき	5	施設の雰囲気に対する肯定的な意識形成	・施設の中の楽しそうな様子がよく伝わってきて見ている方もわくわくしました。 ・とても楽しそうだったし、ぬくもりを感じました。 ・初めて障がい者施設を見ましたが、予想以上に明るくて驚きました。
		6	施設について知識欠如であった認識	・今まで障がい者や障がい者施設について何の知識もありませんでした。
		7	施設に持っていたネガティブな印象の意識変容	・施設はもっと閉鎖的なものをイメージしていたけれど、明るくておしゃれできれいで想像よりずっといいところだった。
		8	施設製品や、施設への賞賛や意外性、興味喚起	・クッキーがとても美味しかった。 ・大変おしゃれなカフェに驚いた。 ・今日の授業を通して、障がい者施設に興味を持った。私もこれを機にパンを買うなどして支援したいと思った。
③	交流できた喜び	9	成果物(PV)を観てもらえた嬉しさ	・自分たちが作ったプロモーションビデオがこのような形でさをり織りの制作者の方々に届いて嬉しかったです。面白かったと言ってくれていただき、作ってよかったなと思いました。 ・プロモーションビデオを見てもらっている時にかわいいという声が聞こえたのが嬉しかったです。 ・ビデオを見てくださっている方々が良い笑顔だったのが印象的でスクエアブラウスを作った甲斐があったと感動でした。
		10	貴重な経験としての認識	・今回のような授業がないと知ることが出来ないことも多いと思います。貴重な経験になりました。
④	制作物への意識変容	11	作り手を知ったことによるブラウスへの愛着喚起	・すごく心を込めて作っているのだろうと思っていただけ、実際に話を聞いて真剣な気持ちが伝わってきました。ブラウスを大切にしたいと思いました。 ・あの織物の裏にストーリーがあることにジーンとききました。

⑤	障がい者に対する意識形成	12	通所者のPVへの反応についての気づき	・美しいさを織りを織られた方が作品を見せる時に照れる反応などが普通で、自分の先入観を見直すべきだと痛感した。
		13	障がい者との壁を感じない・身近であるという意識形成	・障がいがあるとか健常者であるとか関係ないんだなと思いました。 ・私たちと変わらず生き生きと仕事をしている姿を見てとても身近に感じた。 ・「障がい者」と聞くと距離を感じるけど、そんなことはないなと思った。 ・障がいがあるからといって障がいを持たない人と何の違いもない。
		14	障がい者は輝かしいという意識形成	・画面の向こうに映る施設の方々の姿はとてもたくましく輝かしいように感じました。
		15	自分の力で何かする大切さへの意識形成	・障害を持っているかどうかにかかわらず、自分の力で何かをすることは活力になるのだと分かった。
		16	身近な障がい者に対する不安の和らぎ	・障がいを持つ従兄弟の将来を心配していたけれど、施設の様子に不安がやわらいだ。
⑥	障がい者に対して非対等な視点の保持	17	障がい者に対して非対等な視点の保持	・障がい者といっても普通に売っているパンや私がする裁縫よりずっと良いものを作っていてすごいと思った。
⑦	成果物(PV)発表を経た学び	18	よりよいPVのあり方への気づき	・初めて動画を見る人にとってナレーションによる説明が最も頭に入ってきやすそうだった。また、効果音やBGMのインパクトは聞き手を引き付けるために重要だった。
⑧	インターネットを用いた交流	19	インターネットで遠くの人と繋がれる技術への肯定的な意識形成	・ネットで遠くの人と移動しなくても交流が取れるのはすごいと思った。顔を見れたり話ができて楽しかった。 ・簡単に離れて人と繋がれることも実感した。海外とも繋ぐことが出来たら素晴らしいと思う。
		20	接続環境が良くないことによる交流の難しさの認識	・音声聞き取りづらかったけどコミュニケーションとれて、すごいなと思った。
⑨	気づきの発信の必要性	21	交流を遠して気づいたことを発信すべきという意識形成	・きれいなさを織りを見て、施設の方の技術の高さに驚いた。こういった才能はもっと世間に知られるべきだと思う。 ・実際に作っている所を見ると実感や親近感がわき、とても興味や理解が深まるなと思いました。障がい者が作っているからといって偏見を持たずに何も変わらないむしろ丁寧に大切に作られているので、そういう先入観のない知識をたくさんの人に伝えていきたいと思いました。 ・カフェを行っている所があるのは初めて知りました。雰囲気、とてもおしゃれでクッキーもとてもおいしく、「障がい者施設」という一般的な医療的な施設というイメージとは全く違うもので、他の人にも知ってほしいと思いました。

られる。「全く思わない」と答えた1名の生徒は、自由記述において、「実際に施設を訪問しなかった」という感想を記述しており、インターネットによる交流には関心が持てなくとも、施設に関心を持っていることが判明した。

4.3.2 自由記述の結果

アンケートでの自由記述については、その内容の特徴をまとめた。全109回答・累計396文が21個の概念として抽出された。さらに、全体像や概念同士の関係性も検討しながら、21の概念を包括する9個の上位カテゴリーを生成した。表1は、カテゴリーと概念を、それぞれの概念のヴァリエーション（具体例）と共に一覧にしたものである。

4.3.3 カテゴリーと概念の生成

表1に表した①～⑨のカテゴリーと、それぞれが含む【概念】は以下の通りである。

カテゴリー①は、さをり織りを通じた気づき、である。ここでは、【さをり織りの魅力や作り手の思いへの意識形成】、【さをり織りの技術の高さへの意識形成】、【さをり織りに表れた個性への意識形成】、【さをり織り体験への意欲喚起】の4つの概念が抽出された。

カテゴリー②の施設についての気づき、では、【施設の雰囲気や肯定的な意識形成】、【施設について知識欠如であった認識】、【施設に持っていたネガティブな印象の意識変容】、【施設製品や、施設への賞賛や意外性、興味喚起】の4つの概念が抽出された。カテゴリー③交流できた喜び、では、【成果物(PV)を観てもらえた嬉しさ】、【貴重な経験としての認識】の概念が抽出された。カテゴリー④は、制作物への意識変容、である。【作り手を知ったことによるブラウスへの愛着喚起】の概念が抽出された。カテゴリー⑤の障がい者に対する意識形成、では、【通所者のPVへの反応についての気づき】、【障がい者との壁を感じない・身近であるという意識形成】、【障がい者は輝かしいという意識形成】、【自分の力で何かする大切さへの意識形成】、【身近な障がい者に対する不安の和らぎ】の5つの概念が抽出された。カテゴリー⑥障がい者に対して非対等な立場の保持、では、概念として【障がい者に対して非対等的な視点の保持】が抽出された。カテゴリー⑦成果物(PV)発表を経た学び、では、【よりよいPVのあり方への気づき】の概念が抽出された。カテゴリー⑧インターネットを用いた交流、では、概念【インターネットで遠くの人と繋がれる技術への肯定的な意識形成】、【接続環境が良くないことによる交流の難しさの認識】が抽出された。カテゴリー⑨気づきの発信の必要性、では、【交流を遠して気づいたことを発信すべきという意識形成】が概念として抽出された。これらのカテゴリー及び概念を生成した対象の109回答全てを検討した結果、新たな概念やカテゴリーが生成しないことを確認したため、理論的飽和化に達したと判断し、分析を終了した。

比較的多い概念として、概念9の成果物(プロモーションビデオ:PV)を施設の方々に見て貰い交流できた嬉しさが51文、概念1のさをり織りの魅力や作り手の思いへの意識形成が41文、概念5の施設への雰囲気や肯定的な意識形成が31文、概念20のインターネットで遠くの人と繋がれる技術や交流への肯定的な意見形成が24文見られた。

以上の概念から、以下のことが明らかになった。

生徒は、さをり織りを紹介され実物に触れて活用し、その後施設との交流を行った事により、【さをり織りの魅力や作り手の思いへの意識形成】、自分にはとてもできないような【さをり織りの技術の高さへの意識形成】、また、様々なさをり織の色や織り方に、【さをり織りの表す個性への意識形成】を行い、障がい者の個性までも理解した。さをり織への興味関心を高め、延いては【さをり織りの体験への意欲喚起】に繋が見られる等、さをり織りを通じた気づきを得た。また、【作り手を知ったことによるブラウスへの愛着喚起】も見られ、作り手がさをり織りに込めた想いや作業の様子を知ることによる制作物への意識変容も見られた。交流による施設についての気づきとして、施設の明るさ、温かみや、綺麗で快適であると言った【施設の雰囲気や肯定的な意識形成】や、カフェ等の魅力が【施設製品や、施設への賞賛や意外性、興味喚起】に繋がった。今

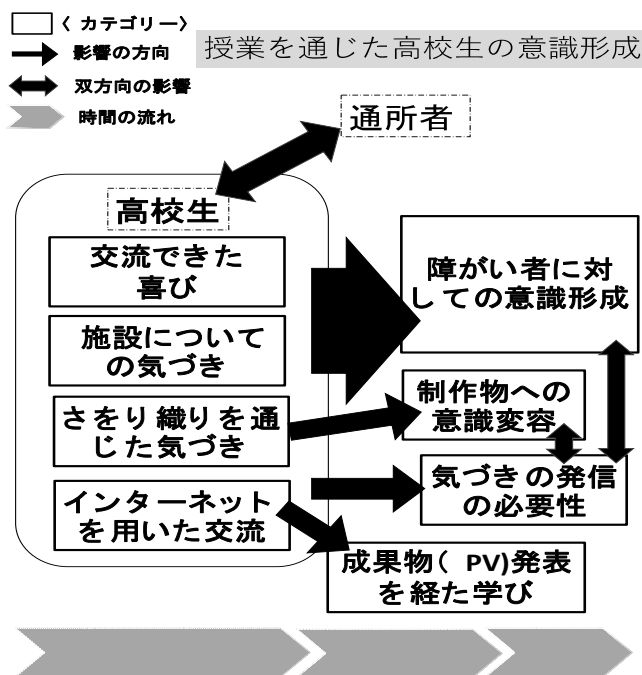


図4. 授業を通じた高校生の意識形成

まで【施設について知識欠如であった認識】をし、【施設に持っていたネガティブな印象の意識変容】や、肯定的な施設への理解へと繋がった。

また、生徒は成果物を上映した際の双方向のやり取りや、肯定的な施設側からの反応に、【成果物(PV)を貰えた嬉しさ】ややりがいを感じ、【貴重な経験としての認識】を持った。このような体験は、生徒に新たな障がい者に対する意識形成をもたらした。【通所者のPVへの反応についての気づき】として、さをり織りが登場する際や、さをり織りの作品紹介時の反応に、大きな喜びや照れ、誇りといった通所者の感情を見出したことが、【障がい者との壁を感じない・身近であるという意識形成】や、生き生きと仕事をする姿に感じた【障がい者は輝かしいという意識形成】、【自分の力で何かする大切さへの意識形成】に到った。また、このような体験が、自身の親族といった【身近な障がい者に対する不安の和らぎ】に繋がることもわかった。

一方、障がい者理解は肯定的に深まったものの、【障がい者に対して非対等な視点の保持】を基礎として感想を述べていると窺われる例も見られた。成果物(PV)発表を経た学びとして、【より良いPVの技術的なあり方への気づき】があり、音声や字幕の入れ方等、よりユニバーサルデザインたらしめるための改善点への気づきが得られた。

インターネットを用いた交流については、【インターネットで遠くの人と繋がれる技術への肯定的な意識形成】があり、映像を通して施設を知る驚きや新鮮さ、理解への満足感、楽しさ、を生徒は感じ、今後海外も含む別の機会でのネット交流活用への意欲喚起を持った生徒も見られた。しかしながら、一部ネット接続状況が悪かったことから、【接続環境が良くないことによる交流の難しさの認識】を持つ生徒もいた。様々な気づきから、生徒は【交流を通して気づいたことを発信すべきという意識形成】を行い、授業を通じて理解を深め、障がい者の才能や製作品、施設の様子、障がいのあるなしは関係ない、といったことは広められるべきであった。このような生徒の意識を分析し表したのが図4である。

5 考察

本研究では、高校普通科必修の家庭科において、高校生の障がい者への肯定的な意識を深め、多様性、ダイバーシティを尊重する視点を育成する手法を検証することを目的とし、方法としてさをり織りを用いたブラウザの作成、ビデオ作成、タブレットPCでの事前調べ学習、インターネットを活用した障がい者福祉施設との上映交流会等を用いた。

分析した生徒の事後アンケートからは、授業の初めにさをり織りが紹介され実物に触れることで、初期段階からさをり織りの魅力や技術、個性に思入れを感じ取る生徒がいる一方で、インターネットで双方向に交流することで初めて生じる、製作へのやりがいや技術への意識、理解の深化、関心、親近感の意識形成も見られ、障がい者の製作品を高校内の授業に用いるにとどまらず、製作品を用いた施設との交流が生徒の意識形成に寄与したと言える。

施設や施設の方々の様子に対し、「楽しそう」「温かみ」「綺麗」といった言葉に表現されるような肯定的

な意識形成が成され、生徒は、自分たちが熱心に製作したブラウスやブラウスを用いた成果物(PV)を見て喜んで貰えた嬉しさや、やりとりの際の通所者の暖かい言葉や反応の良さは、大きく生徒の肯定的な意識形成に寄与した。生徒によっては、施設や知的障がい者とのコミュニケーションに対し従来持っていたネガティブな印象を払拭するような意識変容に繋がった。

このような今回の結果を鑑みると、時間や距離といった様々な制約のある外部機関との交流を、ICT 活用によって実現させることは十分に意義があると言え、より良い技術的な向上が、更なる深い交流に繋がると考えられる。

また、さをり織りの活用の効果が、本研究で特筆すべき点である。さをり織りの高い技術や、個性溢れる色彩や織、交流時に通所者それぞれが表現する感情を、遠い場所の施設とのインターネット交流を通じて実際に知ることにより、生徒は、楽しい、嬉しい、驚き、といった肯定的な感情と共に、障がい者への理解の機会を得て、障がいのあるなしに関わらない「個」としての才能や「輝き」、人格に対する認識形成が出来たことが明らかになったと言える。

先行研究において、普通学級と特別学級の交流の仕方によっては、結果として「誤った認識を固定する可能性さえある」(菊池, 舟橋, 須賀, 1996, p151) ことが指摘されているのは先に述べた通りであり、実際に分析における生徒のヴァリエーションの中には、小学生の頃に交流したことにより、知的障がい者の特別支援学級の児童に対し、コミュニケーションが取りにくい印象を持っていた、とするものも見られた。本研究では、障がいの有る無しに関わらない、それぞれの才能、能力、「輝き」や個性に着目しやすい交流を目指したことにより、生徒は肯定的な理解を深めることが出来た。知的障がい者を「障がい者」と一括りにするのではなく、様々な個性を携える一個人として捉え、互いの個性、才能、違いの差の幅を認め合い、多様な視点を育み、共生していくダイバーシティ教育の一步となったと言える。

さらに、抽出された生徒の概念のヴァリエーションには、通所者にとっても、自分たちが心を込めて制作し、誇りを持っている作品が、高校生により活用されて紹介されたことが大きな喜びとなり、その感情が高校生によく伝わったことが表れた。ICT を用いたことで実現した、必修科目において全員で、生徒からの発信も含む双方向の交流教育は、高校生、通所者双方にとって意義があったと言える。

一方、障がい者と非対等的な立場に留まって理解を深めたと感じさせる概念も抽出されており、さらなる理解・ダイバーシティ教育促進のためには、複数回の交流による理解の深化や他の手法の模索が今後の課題である。

また、本研究を通じ、何度も「障がい者」という呼称に違和感を感じ、同様に違和感を感じる通所者とも議論する機会を得た。障がいがある、無しの前に一人の人間として、皆がそれぞれの個性の「輝き」を認め合い、様々な視点を生かすことで、より良い持続可能な未来を創造していくことが、ダイバーシティ実現であり、必要なことである。家庭科教育は、持続可能性や共生をキーワードとしている教科である。家庭科教育が担うことのできる役割はどのようなものかを、考えて行きたい。

註

1. 障がい者については、「障害」「障碍」と行った表記があるが、本論文では、筆者による表記は「障がい」で統一し、引用や法律名は引用元に準じる。
2. 家庭科において ICT を活用した交流としては、東京の高校と徳島県の伝統技術職人とのインターネットビデオ通話を用いた交流指導(葎内, 2014, 2017)がある。
3. 用いられる糸も、工業糸の余り糸をリサイクルしたもので、環境にも優しく、様々な種類の糸が繋ぎ合わされたものである。
4. 代表作品の内、最優秀動画1本は、後に、環境展示会『エコプロ 2016 環境とエネルギーの未来展』(主催:(一社)産業環境管理協会・日本経済新聞社, 開催:2016年12月8(木)~10(土), 於東京ビックサイト)にて展示された。

引用文献

- 城みさを, 城英二 (2011) 『さをり織り好きに織る』 ぶどう社.
- 菊池るみ子, 舟橋久子, 須賀香世 (1996) 「障害者との共生をめざす家庭科教育に関する研究—現代手織りを通した小学校と大学における交流教育の試み—」 『日本教科教育学会誌』 19(3) : pp.149-156.
- 菊池るみ子, 山石健次, 影山みか, 舟橋久子 (1993) 「障害者との共生をめざす家庭科教育に関する研究(第1報) : 障害者問題に関する現場実践の現状と教育効果」 『日本教科教育学会誌』 16(3) : pp.117-125.
- 皆川勝子, 福井典代 (2016) 「特別支援学校高等部と連携した消費者教育の実践—高校生におけるキャリア教育の視点から—」 『日本家庭科教育学会第59回大会ポスター発表要旨』 於 新潟朱鷺メッセ.
- 中川房子, 藤田美由紀 (1997) 「TEACCH プログラムによるさをり織り指導:自閉性障害者の行動障害の改善との関連について」 『日本家庭科教育学会誌』 40(1) : pp. 9-14.
- 野中美津枝, 中間美砂子 (1996) 「知的障害者との交流体験学習導入による福祉意識の形成 : 高校家庭科における男子生徒を対象とした実践を通して」 『日本家庭科教育学会誌』 42(1) : pp. 9-15.
- 葭内ありさ (2014) 「高校家庭科におけるエシカル・ファッションを用いた 消費者市民教育の授業実践 -IT と校外連携, 他者への伝達を活用した倫理的消費学習とその効果-」 『日本家庭科教育学会第58回大会発表要旨』 於 岡山大学.
- Yoshiuchi, A. (2017) 「 Learning about Ethical Fashion in Home Economics Classes: Experiences, Lectures, and Information Technology as Tools for Consumer Education」 『International Journal of Home Economics (IJHE)』 Vol.10 (2) : pp. 64-76.

謝辞

本研究にご協力いただきました福祉施設の職員, 通所者の皆様と, 率直な意見を提供していただきましたA高校の生徒の皆様と深く感謝申し上げます。

付記

本研究は, 日本学術振興会科学研究費奨励研究(葭内, 2016, JSPSN NO.16H00147)の助成により行った。また, 本論文は日本家庭科教育学会第60回大会(2016年, 於東京・国立オリンピック青少年センター)にて発表済みのものに加筆したものである。
